

『麦と毒麦』

'22/01/30

聖書箇所: マタイの福音書 13 章 24-43 節 (新約 p.26-)

多分、皆さんは、こういったような言葉を、耳にされたことがあるのではないのでしょうか？…「この世的なクリスチャン」とか、日曜日にだけ聖書を読むような「サンデー・クリスチャン」、あるいは、『キリストにある幼子』(I コリント 3:1) など…。確かに、私たちクリスチャンは、便宜上、こういったような言葉を使って、私たちの周りには、いろいろなクリスチャンが居るのだ！ということ、私たちの経験からも知っています。

でも、どうぞ、皆さん、考えてみてくださいませ？ 本当に、聖書のみことばは、救われた後も、この世に属し続けてしまうクリスチャンについて…(=この世とは切っても切り離せないような信仰者？)、あるいは、神様(のみことば)に従っていかうしないクリスチャンや、いつまで経っても、一向に成長しないクリスチャンについて、教えてくれているのでしょうか？

…と言いますのは、私たちが先週、マタイ 13 章のみことばから学んだように、イエス様は、本当に救われている者たちは皆、30 倍、60 倍、100 倍もの、良い実を結ぶのだということが教えてくださったのではないのでしょうか？先週、私たちが学んだように、例え、みことばを聞いて、喜んで、すぐ受け入れたとしても…、そのみことばのために、困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまったり…、あるいは、この世に対する愛や富に対する執着などのゆえに、真の神様から離れていってしまうのなら、果たして、それらは、本物の信仰と言い得るのでしょうか？…1 度は信仰を告白してくれても、しばらくして、教会や、あるいは、神様から離れてしまった者たちは、本当に救われていたのでしょうか？

命題: イエス様が教えてくださった、「本物のクリスチャンの見分け方」とは？

今日、私たちは、先週と同じマタイ伝 13 章のみことば…、イエス様が話してくださった「4つの土地に関する例え話」のすぐ後に記されてあるみことばから、あのイエス様が教えてくださった、「本物のクリスチャンの見分け方」について学んでいきたいと思えます。そうすることによって、まずは、私たち自身が、自分の信仰を吟味することができ…、この教会からは誰一人、「自分は救われていて、天国へ行けると思っていたが、現実には行けなかった…」というような自称クリスチャン、あるいは、偽クリスチャンといったような被害が出てこないことを願います。

I・聞く耳を持っているかどうか？(24-30 節、36-43 節)

まず、今日のみことばが最初に教えてくれているポイントは、神様からのみことばを、しっかりと、「聞く耳」を持っているかどうか？ということにあります。神様によって、本当に救われた者たちは皆、神様のみことばを聞こうとする！耳を傾けるのだ！ということです。まずは、そういったことを確認していきたいと思えますので、初めに、今回のみことばの内、24-30 節を読ませていただきます。そこには、こうあります。

24 イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は、こういう人にたとえることができます。

ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。

25 ところが、人々の眠っている間に、彼の敵が来て麦の中に毒麦を蒔いて行った。

26 麦が芽ばえ、やがて実ったとき、毒麦も現れた。

27 それで、その家の主人のしもべたちが来て言った。『ご主人、畑には良い麦を蒔かれたのではありませんか。どうして毒麦が出たのでしょうか。』

28 主人は言った。『敵のやったことです。』すると、しもべたちは言った。『では、私たちが行ってそれを抜き集めましょうか。』

29 だが、主人は言った。『いやいや、毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。』

30 だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時期になったら、私は刈る人たちに、まず、毒麦を集め、焼くために束にしなさい。麦のほうは、集めて私の倉に納めなさい、と言いましょ。う。』

実は、今読んだ 24 節には、接続詞などは記されていないのですが、この部分を、原語のギリシャ語で観察してみると、普通に、「…彼は、別の例えを話された…」という感じで、話しが続けられてあります。…ということは、恐らく、ここに記されてあるエピソードは、先週に学んだ「4つの土壌」の例えが話されたのと同じ状況…、つまり、その流れの中で、イエス様が続けて話されたものであると思われる。これまた、先週の礼拝で学んだことですが…、ここでも、イエス様は、大勢集まっていた群衆たちに対して、話の本題(『天の御国』=救いに関する真理)を話さずに…、例えの部分だけを話しておられます。

前回と同様、この時も、イエス様は弟子たちの質問に答えるかたちで、その解き明かしを弟子たちに対して“だけ”教えてくださっています。それが、今日のみことばの 36-43 節の部分です。今度は、そこを読ませていただきます。そこには、こうあります。

36 それから、イエスは群衆と別れて家に入られた。すると、弟子たちがみもとに来て、「畑の毒麦のたとえを説明してください」と言った。

37 イエスは答えてこう言われた。「良い種を蒔く者は人の子です。

38 畑はこの世界のこと、良い種とは御国の子どもたち、毒麦とは悪い者の子どもたちのことです。

39 毒麦を蒔いた敵は悪魔であり、収穫とはこの世の終わりのことです。そして、刈り手とは御使いたちのことです。

40 ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、この世の終わりにもそのようになります。

41 人の子はその御使いたちを遣わします。彼らは、つまずきを与える者や不法を行う者たちをみな、御国から取り集めて、

42 火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。

43 そのとき、正しい者たちは、彼らの父の御国で太陽のように輝きます。耳のある者は聞きなさい。

●『天の御国』とは？

皆さん、気付いてくださいました？ここでも、イエス様は、『耳のある者は聞きなさい！』とおっしゃって、すべての者たちに分かりやすく教えるというよりも、話しを聞く側の関心と言うか、真剣に、話しを聞こうとする者に対して“だけ”、特別な神の真理を明らかにしようとしてくださっています…。

まず、ここで注目したいのは、『天の御国』という言葉です。実は、この表現は、新約聖書中、ほとんど、マタイの福音書にしか記されてありません。唯一、例外的に、II テモテ 4 章で使われてある以外は、すべて、マタイの福音書にしか出てきません。そのため、一部の聖書解釈者たちは、この『天の御国』という言葉が指しているのは、一般的な救いのことでは無くて…、神がユダヤ人たちに対して約束された、「特別な王国」のことを指しているのだ、というようなことを言われることがあります。

でも、本当にそうでしょうか？…と言いますのは、こと全く同じエピソードが記されてある、平行箇所のルカ 8 章と見比べてみると分かります。実は、そこでルカは、マタイ 13:11 では、『天の御国』と表現してあるところを、『神の国』(ルカ 8:10)と表現していますでしょ？…でも、マタイ伝に記されてある、「4つの土壌の例え」と、ここルカ 8 章に記されてある例えとが、全く同じことを書き記し…、全く同じことを教えているというのは明白です！そうでしょ！…ということは、マタイが言う『天の御国』と、ルカが言う『神の国』(これを、多くの神学者は「救い」と理解している)は、基本的に、同じものであると言い得るのではないのでしょうか(少なくとも、この文脈では)？

●『麦』と『毒麦』との違い＝救いの有無！

さあ、それでは、ここで語られてある、「例えの内容」について見ていきましょう。ここで、イエス様は、同じ畑に蒔かれた、麦と毒麦との例えについて話してくださっています。その少し前で教えてくださった「4つの土壌」に関する例えの場合は、蒔かれた種は同じで…、蒔かれた場所に違いがありました…。しかし、今回の例えでは、蒔かれた場所は同じで…、蒔かれた『種』や蒔いた人物に違いがあって…、そのために混乱が生じてしまった、というエピソードです。ここで、『毒麦』と訳されてある言葉(ζιζάνιον)は、「イネ科」に分類される雑草の一種で、一見、普通の麦によく似ていて、この麦自体に毒があることは、普通無いそうですが、その実を食べてみると、かなり苦味があるのだそうです。

ここで言われてあることは、この世の中では、麦と毒麦とが混在してしまっていて…、『収穫の時期』になるまで、その違いが明確にならないので、収穫の時まで、そのままにしておこう、ということです。じゃあ、その『収穫の時期』が何を指しているのか？と言うと、後半の39節で説明されてあるように、『収穫とはこの世の終わり』を意味しています。…ということは、つまり、私たちの中の誰が救われていて…、誰が救われていないのか？ということとは、最終的には、『世の終わり』が来る時まで、はっきりしないということ、イエス様は、ここで教えてくださっているのです。

●悪魔の子？神の子？＝「新生」の必要性！

どうぞ、今日のみことばに戻っていただきますと…、ここの解き明かしで、イエス様は、『麦』を蒔いたのは、『人の子』(恐らく、イエス様?)で、『毒麦』を蒔いたのは、『悪魔』である、ということをおっしゃっています。つまりは、「誰が救われるか否か？というの、もう生まれながらに決まっている」ということでしょうか？

⇒いいえ。恐らく、イエス様は、そういったことをここでおっしゃりたかったのではないと思います。実は、ここと同じようなアイデアが、1ヨハネ3章でも教えられてあるのですが…、そのみことばは、私たち人間は皆、生まれた瞬間は、悪魔に従っている！ということをおっしゃっているのです…。

多分、有名なのは、エペソ2章です。そのみことばは、こう教えます。エペソ2:1-2、『あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、2 そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の權威を持つ支配者(＝悪魔?)として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。』って…。このみことばが教えてくれているように、私たち人間は皆、かつては、悪魔が作った流れに沿って、その悪魔に従って生きていたのです！だから、私たちは、その当時の主人であった、悪魔のように…、また、悪魔が喜ぶように、平気で、罪を犯し続けていたのです。

ですから、本来ならば、そのような悪魔に従っていた、私たち人間が救われることなど有り得ませんでした。でも、だからこそ、天の神様は、私たちのために、救い主であるイエス様を遣わしてくださったのです！皆さんも、よくご存知だと思います。ヨハネ1章では、イエス様を信じたクリスチャンについて、このように説明してくれています、『12 しかし、この方(＝イエス・キリスト)を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。』って…。私たちは、イエス様のことを信じ…、救われたことによって、『神の子』とされたのです！

例えば…、皆さん、覚えてくださっています？ヨハネ3章、イエス様のところに、「ニコデモ」というパリサイ人がやって来ました。そこで、イエス様は、救いについて、こう説明してくださったでしょ？『3 …人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。』あるいは、『5 …人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。』って…。このように、私たちは、生まれながらの状態ではなく…、新しく生まれ変わらないといけな！救われ得ないのです！…そうして、それを可能にするのが、信仰であり…、御霊なる神様の御働きなのです…。

II・成長 しているかどうか？(31-33節)

その次に教えられてありますのは、その人が、主の前に、“成長”しているかどうか？であります。私たちのことを救うことができる、生きた、本物の信仰には、その信仰が生きているがゆえに、はっきりとした成長を見ることが出来ます。そういったことについて、今日のみことばの31-33節は、こう教えてくれています。

31 イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は、からし種のようなものです。それを取って、畑に蒔くと、

32 どんな種よりも小さいのですが、生長すると、どの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るほどの木になります。」

33 イエスは、また別のたとえを話された。「天の御国は、パン種のようなものです。女が、パン種を取って、三サトンの粉の中に入れて、全体がふくらんできます。」

●『からし種』の特徴

今読んだ31節でも、また、33節でも…、イエス様は、『天の御国』という言葉を使って、本物の信仰(＝救い)について説明してくださっています。この短いみことばで、短い2つの例えが使われていますが、その言わんとしていることは、基本的に同じです。だから、イエス様は、同じような短い例えを、続けざまに語ってくださったのです。

その例えの1つ目は、『からし種』に関するものであります。ところで、皆さんは、『からし種』という植物をご存知でしょうか？実は、私は、教会に来るまで、ほとんど、この『からし種』などという植物のことを聞いたことがありませんでした。

実は、この『からし種』という植物は、恐らく、「くろがらし」の一種で、その昔は、マスタードの原料として使われていたそうです。その種の大きさは、わずか、0.5mmほどで、クリスチャンの方なら、本物の『からし種』も一緒にラミネートされた、葉などを持っておられる方がおられるのではないのでしょうか？そのからし種のスゴイところは、わずか、0.5mmほどの大きさの種が、あつと言う間に、2-3mほどの大きさにまで生長するのだそうです。

ここで、イエス様が、『からし種』のことを例えに使ったのは、からし種が、①他の野菜に比べて、小さいということ、②生長すると、他の野菜たちよりも、大きくなるということ、③そして、恐らくは、当時の民衆たちがよく知っていたから、であります。つまりは、「どんなに小さいものであっても、大きくなる！」ということ、イエス様はおっしゃっているのです。

●『パン種』の特徴

どうぞ、皆さん。もう1度、今日のみことばである、マタイ13:33に戻ってみてください。そこで、イエス様は、続けざまに、『パン種』の例えをもって、同じことを説明してくださっています。ところで、皆さんは、今度、『パン種』のことは、ご存知でしょうか？…恥ずかしながら、料理をほとんどしない私は、『パン種』のことも、あまり詳しくは知りません。

現代では、普通、パンを作る時、イーストなどのパン酵母を使って、パンを膨らませるのだそうですが、今から2000年前の、この当時では、十分に発酵させた、古い練り粉の一部を残しておいて、それを次のパン作りのために使っていたそうで…、それを「パン種」と言うのだそうです。このパン種を入れるか入れないかで、パンが膨れるかどうかが決まってくるわけです。

ここで、イエス様は、『女が…』ということをおっしゃっていますが、この場合、『女』という言葉には、深い意味はありません。この当時は、主に、女性がパン種を使って、パンを作ったり…、料理をしていたから、それをイメージして、イエス様が話されたと思われます。それと、もう1つ、その後で、イエス様は、『三サト

ンの粉の中に入れると…」とありますが、これまた、特別、深い意味はありません。1サトンとは、今で言う、13.17 リットルのことで…『三サトン』という量は、この当時の、1度で焼ける最大量のパンの量であったようです。つまり、わずかなパン種であっても、たくさん粉を膨らませることができる、ということでしょう。

ですから、大切なのは、女性が作ったという話でも、三サトンという、パンの量でもありません。大切なのは、ちゃんと、パン種を入れたパンが、膨らんでくる！という話です。…それと比べて、パン種を入れたパンは、焼いても…、大きく膨らんでくることはありません。だって、パン種が入っていないからです。

皆さん、気付いてくださいますか？ イエス様は、ここマタイ13章で、「4つの土壤に関する例え」でも、また、妻と毒妻に関する例えでも…、そして、ここ「からし種に関する例え」でも、みな、共通して同じ話をしておられます。それは、本物の信仰を持った者たちは皆、良い実を实らせることができる！ということですよ。

だって、例えば、イエス様は、マタイ7章でも、本物の信仰と偽りの信仰とについて、教えてくださいますが、そこで、イエス様は、どのように教えてくださいました？ 例え、聖書の箇所が違っていても、そこで教えられていることが、基本的に同じことであれば、聖書の中で、矛盾することはありません！ なぜなら、聖書は、真唯一の神様が、私たち人間に分かるように書き送ってくださった、完全な…、神様からのお言葉であるからです。

そのマタイ7章で、イエス様は、本物の信仰を持った者と偽りの信仰者との見分け方について、どう教えてくださいましていられるのでしょうか？ どうぞ、皆さん、前の画面に出てくるマタイ7章のみことばをご覧くださいませ…その16節以降、『16 あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。17 同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。18 良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。19 良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。20 こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。』って…。そうして、その後には、こう続いているのです、『21 わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみことばを行う者が入るのです。』って…。

あれ？ イエス様は、ここでは、「信仰による救い」ではなくて、「行ないによる救い」について教えてくださいましていられるのでしょうか？ …いいえ！ イエス様が、ここで教えようとしてくださっているのは、“単なる行ない(≒表面的な行ない)”のことではなくて、“救われた者たちが必ず実践していくはずの生き方”のことなのです！ そのために、イエス様は、ここで、分かり易い例えを使って、説明しようとしてくださっているのです…。

どうぞ、皆さん、今のみことばに続く、マタイ7:22以降をご覧ください。そこで、イエス様は、「実」ということについて、こう教えてくださいまして、「それは、あなたが聞いたみことばを実践しているかどうかだ！」って…。『22 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう、『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行ったではありませんか。』23 しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』24 だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。25 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。26 また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行わない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。27 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。』って…。

⇒いかがですか？ 幾つかのヒントがあったように思いますが、本当に救われた者たちと、そうではない者たちとの、どこに、その違いを見付けることができる！とイエス様は教えてくださいましていられるのでしょうか？ …彼らの、イ

エス様に対する、『主よ！主よ！』という信仰告白でしょうか？ それとも、彼らが行なってきた、預言や悪霊を追い出すという奇蹟や数々の奉仕でしょうか？ いいえ、そうではありません…。だから、イエス様は、最後に、もの凄く分かり易い例え話をもって教えてくださいましていられるのです。簡単に言うと、それは、イエス様の話ってくださいませ。みことばに対する愛であり…、従順であります。そうじゃないでしょうか？ …もしも、私たちが、例え、どれほどの聖書的な知識や、あるいは、たくさん奉仕をしていても…、もしも、この聖書のみことばに対する従順さや愛が無いのなら、私たちは、自分たちの信仰を見直す必要があります。そうじゃないでしょうか！

Ⅲ・神の前に、へりくだって いるかどうか？ (34-35 節)

では、最後、3つ目のポイントで、私たちが注目していきたいことは、その人が、真の神様の前に、「へりくだって」いるかどうか？ ということ、です。どうぞ、今日のみことばであるマタイ13章に戻っていただきまして、その、34-35節をご覧ください。そこには、このように、記されています。

34 イエスは、これらのことをみな、たとえで群衆に話され、たとえを使わずには何もお話しにならなかった。

35 それは、預言者を通して言われた事が成就するためであった。「わたしはたとえ話をもって口を開き、世の初めから隠されていることどもを物語る。」

●『隠されていること』とは？

今読んだ部分には、イエス様が、『これらのこと』を群衆たちに、例えを使って話されたこと…、もう1つ言えば、例えを使わないでは何も話されなかった、ということが記されています。…でも、ここで言われている、『これらのこと』って、何でした？ ⇒『天の御国』に関することでしたね？ つまりは、「救い」に関する重要な教えです。でも、一体、どうして、そんなに大切なことを、イエス様は、わざわざ、例えを使って話されたのでしょうか？ しかも、群衆に対しては、その重要な教えに関する「本題」を話すことなく…、例えだけを話された、というのですから、全く驚きであります！ そうじゃありません？

もう、そのことに関しては、先週、「4つの土壤に関する例え」の中で、十分に説明させていただきました。要は、群衆たちの側に問題があったわけでしょう？ 彼らの関心が、「神様の真理」ではなくて…、イエス様の行なう奇蹟や自分の損得に関心があったのです。そこが彼らの問題だったのです。

実は、そういったことが、ここマタイ13章の、今日のみことばを通して、何となく、伝わってきます。…と言いますのは、イエス様の弟子たちは、イエス様が例えを話された後に、ちゃんと聞きに行っていますよね？ 神様の真理を…。一体、イエス様が、本当は、何を伝えたいのか？ そのことを、弟子たちは尋ねに行きました。しかし、群衆たちは、どうでした？ …残念ながら、群衆たちは、一向に、イエス様のところへ行かず、その語られた例えが、具体的には何を意味していたのか？ 自分が、そこから何を学び…、どう変わらなければいけないのか？ ということに関して、群衆たちは皆、関心がありませんでした。だから、彼らは皆、そういったことを尋ねるために、イエス様のところへ行かなかったのです。

どうぞ、皆さん。あの有名な招きの言葉がある、マタイ11章を開けてみてくださいませ。その、25-26節、『25 そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現してくださいませ。26 そうです、父よ。これがみことばにかんじたことでした。』

⇒この直前で、イエス様は、悔い改めや救いについて話して教えてくださいましていられる。しかし、そういったことを、イエス様は、『賢い者や知恵のある者には隠(されていた)』ということをして、イエス様は、明らかにして教えてくださいましていられる。ここでイエス様がおっしゃられた「賢い者や知恵のある者」って、彼らのプライドを感じませんか？

…しかも、26 節を見ても、それこそが神様のみこころにかなったことである！と仰うのです。…と仰うのは、彼らが、神の前に、自分の知恵や賢さを誇っていたからです。だから、彼らは、イエス様のメッセージには、真剣に耳を傾けようとはしなかったのです！…このように、神様の真理に関して…、あるいは、救いに関する重要な教えというものは、皆、同じように…、つまり、均一には示されてはいません。そこには、「神様のみこころ」というものがあるのです。でも、その部分を、よくよく読んでみますと、こういったことと関連があるのです。マタイ 11:15 に、**何とあります？『耳のある者は聞きなさい。』**…ここでも、イエス様は、**『耳のある者は聞きなさい！』**と言って、神様の前に、へりくだって…、神様のみことばに耳を傾けようとする者にこそ、神のみこころが明らかにされる！ということをお教えくださっているでしょ？ 私たちには、こういった態度…、姿勢が求められているのではないでしょか？

●あえて、イエス様が例えを用いられた「意図」とは？

今日のみことばの 35 節で登場してくる、『預言者』というのは、恐らく、14 節で引用されているイザヤのことなのでしょう…。もう、このことについては、先に触れられてありますので、この書を記したマタイも、ここでは、簡単に触れているだけだと思われる。ある意味、残念なことですが…、イエス様が、多くのことをお教えくださっても…、その多くの者たちが、真剣に耳を傾けようとしないうことを、天の神様は、はるか、以前から御見通しであったのです。

ねえ、皆さん…。こういったことは、不公平なことでしょうか？あるいは、神様の側の問題でしょうか？…どうか、皆さん。考えてみてください。もしも、皆さんが、ここの講壇に立って、何か、熱心に伝えたいことがあって、真剣に語ってくださったとしましょう。でも、もしも、会衆のほとんどが、真剣に、耳を傾けることをせず…、皆が、スマホをいじっていたり…、何か別の本を読んでいたたり…、あるいは、寝てしまったりしたら、それでも皆さんは真剣に話そうとされます？…恐らくは、そうじゃなくなるのではないでしょか？

でも、もしも、皆さんの話の後で、一部の方たちだけが、「～さん、さっきの話をもっと詳しく教えてください！」とお願ひされたら、その人たちに対しては、真剣に話しをして下さるのではないでしょか？

どうぞ、今度は、**マタイ 13:12 のみことばをご覧ください？…11 節から、お読みしますが、こうありますでしょ？『11 イエスは答えて言われた。「あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていません。12 というのは、持っている者はさらに与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまでも取り上げられてしまうからです。』**って…。

先週学んだように、このこと、ほとんど同じような教えが、マタイ 25 章にも記されておりました。そこには、こうあります。その少し前から紹介させていただきます。マタイ 25:26-29、『26 ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたのか。27 だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。28 だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』29 **だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。』**

⇒良いですか、皆さん。天の神様は、すべてを御存知です！今、皆さんが、どのような気持ちで、ここに座っておられるか？皆さんが、どのような目的で、聖書のみことばを読んでおられるのか？そうでしょ？もしも、私たちが、神様に喜ばれないような動機で、聖書のみことばを学ぼうとしたところで、神様は、それさえも御存知です。果たして、そのような人に、聖書のより深い真理が示されるでしょか？

どうか、今日、最後に、I コリント 3 章を開けてみてください。その 1 節には、今日のメッセージの冒頭で話したような、『キリストにある幼子』というような言葉が使われてありますが、その 10 節以降をご覧ください。I コリント 3:10-15、『10 与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれ

それが注意しなければなりません。11 というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。12 もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てたら、13 各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。14 もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。15 もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。』

⇒実は、このみことばは、大変、よく勘違いされています。…と言いますのも、先程、言いましたように、『キリストにある幼子』という言葉に加え…、神様の審判がなされて、15 節にあるように、ある人の建物が焼かれて無くなってしまっても、その人自身は、火の中をくぐるようにして助かる、ということが記されてあるものですから、「ほら、見てください！ここに、何の功績(働き？良い実)が無くて、かろうじて、救われる場合があるということが教えられてあるじゃないですか！」と言われる場合があります。

しかし、本当に、そうでしょうか？まず、第1に、その人たちが解釈するような…、何ら良い行ないが無くて問題無い…、救いとは関係無い！というようなことは、聖書のどこを見ても、教えられてありません。また、このみことばに登場してくる人物だって、「かろうじて」、火の中をくぐって、助かっているわけで、聖書は、こういったような救いを勧めているわけでは、決して、ありません。そうでしょ！

第2に、ここで、教えられてあることは、様々な働き(≒奉仕？実？)の真価が、神様の審判によって明らかにされる！ということが教えられてあるわけで…、このかろうじて救われた者は、救われてから、何もなかったではありません。ここで教えられてある、この人物は、たくさんの働きをなしたのです！しかし、その働きの真価(恐らくは、動機？)が、『金、銀、宝石』のような簡単には燃えてしまわないようなものなのか？あるいは、『木、草、わら』などといったような、簡単に燃えてしまうようなものなのか？そういったことの評価が、神様の審判によってなされる！という話です。

皆さんも、この当時のコリント教会が抱えていた問題点を、よくご存知だと思います。この当時のコリント教会のメンバーは皆、“奉仕に熱心であった”のです。彼らの問題点は、どちらかと言うと、その熱心さの中心にあった動機です。彼らは、神様のためではなく、自分のために…、自分たちの名誉のために、様々な奉仕や、特に異言を語ったりすることに熱心であったのです。だから、パウロは、ここ I コリント 3 章で、奉仕の動機について…、今の時代には、その真価がハッキリとされなくても、いずれ、神様の審判が下ったら、それによって、それまでになしてきた奉仕や様々な働きに対する、正当な評価が下るのですよ！ということをお教えしてくれているのです。

だから、パウロは、この I コリント書全体を通して、当時コリント教会のメンバーたちに最も欠けていた、愛について教え…、『愛がないなら、何の値うちもありません。』(I コリント 13:2)とか、『愛がなければ、何の役にも立ちません。』(I コリント 13:3)とか、『いっさいのことを愛をもって行いなさい。』(I コリント 16:14)などと言って…、愛を追い求めるべきことを強く訴えたわけなのです！

< 励ましの言葉 >

今日、最後、皆さんにお勧めしたいのは、どうか、あなたが、クリスチャンであろうとなかろうと…、この聖書のみことばを、自分の損得や言い訳のためではなく…、本当に、真理を探究するのだ！という思いをもって、この聖書のメッセージに耳を傾けていってください。そうして、神様が示してくださった真理に対しては、それが、どのようなものであれ、私は従います！という思いをもって、この聖書のみことばを学んでいってください。神様は、そのような者にこそ、神様の深い真理を、さらに明らかに示して下さるはずであります。今日、このメッセージを聴いてくださった皆さんに、ますます、神様の真理が明らかにされ、神様からの祝福を、さらに多く受けてくださることを、心から願っております。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。